Innocent Rabbit

須藤彦壱（原作：南 晶）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Innocent Rabbit

【Nコード】

N6563Z

【作者名】

須藤彦巻（原作：南 晶）

【あらすじ】

「 やあ、ミス・サヤカ。ボクの名はラビ」
ロンドンの名門大学で生体工学を専攻するサヤカ・オキノは大学首脳陣と軍部の要請を受けて、一人の少年のケースワーカーに就任する。少年の名はラビ。色素の抜け落ちた真っ白な身体と血の色の瞳、不可思議な能力を持つ少年は、軍部の研究材料として飼われている哀れなウサギのような存在だった。最初は純然たる研究者として接していたサヤカだったが、やがて、ラビと心を通わせていく。だが、その果てに待つのはサヤカ自身もその血をひいている日本人 迫

害の果てに純血は絶えたとされる民族の悲劇を揺り起こす過酷な運命だった。

ロンドンの北東部にあるケンブリッジ工科大学の学長、ウィルソン・V・ハートフォード伯爵のオフィスには、世の人々が名門大学の学長のオフィスと聞いて想像するすべてのものがあつた。高い天井、大きな窓、そこに架かる重い色調のビロードのカーテン。磨き上げられた鏡板が張り巡らされた壁。趣味の良いアンティークの家具類。座つたら身体ごと沈んでしまいそうなふかふかのソファ。毛足の長い絨毯。マホガニー材の巨大なデスク。

壁には厳めしい顔をした歴代学長たちの肖像画がずらりと掲げられ、まるで呼び出された劣等生を皆でやり込めようとしてもしているかのように厳しい表情で見下ろしている。立体ホログラムが実用化された今でも、どういう訳か、彼らは頑なに肖像画にこだわる。

(……なんで、わたしがここに?)

サヤカ・オキノは困惑を表情に出さないよう、得意のポーカーフエイスを決め込んだ。

漆黒の長い髪と黒い瞳。東洋人らしい彫りの浅いやわらかな顔立ち。年中日焼けしているので分かり難いが、小麦色に焼けていないところは東洋系に多く見られる黄色がかった肌の色をしている。背丈だけは周囲のサクソン系やスラブ系の娘たちと変わらないが、彼女らほど脚が長くなく、形も良くないのがサヤカのコンプレックスだった。学長の呼び出しにTシャツとジーンズという訳にもいかず、ブラウスとタイトスカートの上に研究室でも滅多に着ない白衣を羽織っている。

サヤカが困惑しているのは、場違いな所に呼び出されたからだけ

ではなかった。

恐る恐るのノックの後、サヤカが背筋を伸ばして足を踏み入れた部屋には6人の男たちがいたが、見知った顔はいつも眠そうな顔で訓示を垂れる学長のハートフォージ卿と、サヤカの担当教授であるブライアン・オブライエン博士だけだった。学長はサヤカに笑みを見せたが、豊かな白い髭と鼻先に乗せられた眼鏡がトレードマークの老人は、サヤカに親愛の情の欠片もない一瞥をくれただけだった。問題は残りの4人だった。濃紺のリーファージャケットにこれみよがしの金モールを這わせた厳めしい連邦政府高官の制服。胸のエンブレムは陸軍情報部第9課 Military Intelligence 通称、MI9のものだった。政府高官のエンブレムを見て、彼らが何の仕事をしているかが分かる者は世間にはあまりいない。軍部になれば尚のことだ。まして、MI9は ウェリントン貿易 なる隠れ蓑の貿易会社を持つほど、世間からその存在を秘匿されている。

困惑を押し隠し、サヤカは舌打ちしそうになるのを懸命に堪えた。彼女が彼らの正体を知っているのは、彼女の父親がMI9に追われた過去を持っているからだ。今は亡き東洋の民族 日本人の血を濃く引いている、というだけの理由で。

時は23世紀。世界が国家という単位で支配されてた時代 2
1世紀は遠い過去のものとなっている。

人類が激動の歴史に淘汰されず、未だに繁栄を享受していることは実は奇跡に近い。

自らだけでなく、その住処たる地球をも滅ぼす力を手にした人類は、手にした炎を理性の支配下に置き続けることができなかった。平和利用の美名の下に世界中に拡散していった核は、21世紀半ばのある日、宗教と民族のぶつかり合いの最中にその力を解放された。直ちに報復の連鎖が起こり、世界は恐怖と怨嗟の声に満たされるこ

ととなった。

相互確証破壊 (Mutual Assured Destruction, MAD) とは本来、

対立する陣営のどちらか一方が相手に対し戦略核兵器を使用した際に、もう一方の陣営がそれを確実に察知して報復を行うことにより、一方が核兵器を使えば最終的に双方が必ず破滅する

という状態のことを指すもので、互いに核兵器の使用を躊躇わせることを意図している。対立する両者が核兵器を突き付けあつて均衡がとれた状態こそが平和なのだ、という論法だ。

だが、愚かな人類は実際に核戦争の火ぶたが切られた後に、その言葉の異なる意味を思い知ることになる。誰かが核兵器を使えば必ず報復が行われ、それを止める手立てはなく、必ず人類の破滅を招くのだと。MAD (狂気) とはよく言ったものだった。

平和を願い、争いをやめよと叫ぶ声もあった。だが、残念なことにその声には力が無かった。一人の日本人が己の研究の成果を世界にもたらすまでは。

サヤカが部屋に入ってきて、軍人たちは勝手な会話を続けた。

彼らが使っているのはドイツ語だった。連邦政府ではドイツ語は準公用語だが、軍部にはドイツ系や東欧出身者が多い為、軍では事実上の公用語の扱いを受けている。

連邦政府の正式な公用語は英語とフランス語、スペイン語とされている。だが、話者の割合は圧倒的に英語とフランス語が多い。かつての人類の版図から考えればスペイン語や中国語の話者の方が圧倒的に多く、そちらが主流になるべきなのだが、スペイン語話者の多い中南米地区は連邦政府にはあまり協力的でなく、公式には連邦

に参加しているものの、実態としては自治州連邦の形をとっている。世界最大級の軍事力を誇った3つの超大国　アメリカ合衆国、ロシア連邦、中華人民共和国　は皮肉にもその軍事力故に相互に滅ぼしあう結果となり、連邦政府への移行は比較的被害の少なかつた欧州を中心に行われた。

だが、自分たちの国々とかつての版図であるアフリカ大陸　比較的被害は軽微だった　を優先する復興政策は南米諸国の強烈な反発を招いた。彼らをまとめ得るかつての宗主国スペインは戦争で疲弊しきっており、連邦政府は更なる争いを続けるよりは緩やかな同盟関係に落ち着かせる方を選ばざるを得なかったのだ。

そういう事情により、現在の連邦の版図は彼らの公式発表によれば南米大陸とカリブ海沿岸諸国、不可侵条約下にある南極大陸、永世中立国であるスイスを除いた地球上のすべて、ということになっている。尤も実際に人類が居住しているのはヨーロッパ大陸、アフリカ大陸、北米大陸の一部、ユーラシア大陸の一部といったところだ。残りの地域は戦争終結から200年近く経った現在も強い放射能に汚染され、人が足を踏み入れることを拒み続けている。

そしてもう一つ、地図上から姿を消した土地がある　極東の島国、日本。

「ミス・サヤカ・オキノかね？」

手持無沙汰に立っているサヤカに気付いて、制服組の中でも一際多くのモールをつけた男が流暢なキングス・イングリッシュで尋ねた。軍の階級章の見方などサヤカは知らないが、他の面々に比べて星の数や線の本数が多く、上の階級らしいことは分かった。

サヤカは押し殺したような抑揚のない口調で「そうですけど？」と答えた。IQ180の知力を見い出され、スカラシップを得て貧民街を後にして早いもので8年。しかし、油断すると今でもコック
二ー　ロンドンの下町言葉が口をついて出る。

話しかけた軍人は鷹揚な笑顔を浮かべて、強引にサヤカの手を取

つて握手した。微かに寄った眉間の皺がサヤカの嫌悪感を余すことなく伝えていたが、軍人は気にした様子はなかった。

「私はデイヴィッド・バーナード准将だ。デイヴと呼んでくれ」

「はい……デイヴ」

サヤカには見えなかったが、彼女が准将を愛称で呼んだ瞬間、ハートフォード卿の口許が皮肉っぽく歪んだ。傍らに立つオブライエ教授は無表情を保っていたが、そもそも研究の虫で世俗に関心を示さないことで知られるこの男はいつでもそうだった。

バーナード准将は自分の仲間たちをサヤカに紹介した。彫りの深い顔立ちのスペイン人の伊達男、エミリオ・セルバンテス中佐。難しい顔をした細面のフランス人、ジャン・ピエール・スキラッチ少佐、軍人にしては丸々とした体つきのにこやかなイタリア人、シモーネ・デイ・ヴァイオ少佐。ドイツ語で話していたくせにドイツ人はいないのかよ、とサヤカは心の中で毒づいた。

「忙しいところを呼び出して済まなかったね、ミス・オキノ。座りたまえ」

准将は自分の私室のような気易さでサヤカにソファを勧めた。サヤカは戸惑って本来の部屋の主に目をやったが、学長の目の動きだけで「座れ」と伝えるという至芸に素直に従うことにした。

「ミス・オキノ　この呼び方は他人行儀だな。サヤカと呼んでも構わないかね？」

他人行儀も何も赤の他人だろうが。サヤカは無表情に頷いた。

「構いません。軍情報部の幹部の方が一介の学生にどういうご用件ですか？」

「一介の学生とは謙遜し過ぎじゃないかね、ミス・オキノ？」

口を挟んだのはセルバンテス中佐だった。口説き文句しか似合わないにやけた形の口許をピンと整えられた口髭が彩っている。

リスが好きそうな顔だな、とサヤカは思った。叔父様趣味のルームメイト、エリザベスの携帯端末に収められた画像を見せられて辟易したことを思い出し、思わず浮かびそうになった苦笑いを懸命に

抑えた。

だが、その薄い笑みをセルバンテス中佐は別のものと捉えた。

「……何がおかしいのかね、ミス・オキノ？」

「いいえ、別に」

金ぴかの衣装を着てフラメンコを踊っているのがお似合いのその髭だよ、とサヤカは内心で嗤った。だが、表情には出さない。その辺りの仮面のかぶり方は気難しいことで知られる担当教授とのやり取りで身につけたものだった。

「それより、わたしが一介の学生じゃないというのはどういう意味でしょうか？」

「言葉通りの意味だよ、ミス・オキノ。ケンブリッジ工科大学の歴史上、初めて飛び級で大学院に進んだ才媛がただの学生であるはずがない」

「更に言うなら、一介の学生に我々がM I 9の人間だと分かるはずもない。そうじゃないか？」

上官の前だというのにソファに深く腰掛け、高々と脚を組んだスキラッチ少佐は忌々しそうにサヤカを見やった。サヤカはそれに部屋に迷い込んだ虫をようやく打ち殺したときのような笑みを返した。「わたし、一言でもM I 9って言いましたか？ 軍には幾つも情報部があるって聞きましたよ」

「誰に？」

「ダニエル・ハント」

サヤカが挙げたのは人気のエスピオナーズの主人公である連邦軍情報部第6課のトップ・エージェントの名前だった。遠い昔、英連合王国に実在したとされるダンディなスパイをモチーフにしているこのことで、決め台詞も彼に倣って「The name is Hunt, Daniel Hunt（名前はハント、ダニエル・ハントだ）」となっている。

「まあまあ、そんなにケンカ腰にならなくてもいいじゃないか、サヤカ」

取り成すように割って入ったのはデイ・ヴァイオ少佐だった。度の強い眼鏡の奥からまん丸い目でサヤカに笑いかけている。

「君が僕らに良い印象を持ってないことは知ってる。君のお父さんを散々追い回した挙げ句、死なせてしまったんだからね」

「おい、シモーネ」

苛立ちを隠そうともせず、スキラッチはデイ・ヴァイオを睨みつけた。

「そんな事実は認められていない。つまらないことを言うな」

「いいじゃないか、ジャン。これから僕らは崇高な目的を果たすべく、協力していかなきゃならないんだよ。その為には強固な信頼関係を結ぶ必要がある。事実を事実として認めることも出来ずに、どうやってそんなことが出来ると言うんだ？」

何が信頼関係だ。サヤカは再び内心で毒づく。

サヤカの父、タクヤ・オキノは所持していたパスポートによれば、中央アジア、南コーカサス地方の小国出身となっていた。

だが、そのいかにも東洋人的な風貌や名前、肌の色などの身体的な特徴、そして何より、今では関連する文献の消失により解析すら困難とされる古語　日本語を話せるという、失われた民族の末裔の要素をすべて持ち合せていた。

そして、それ故にM I 9は彼を着け回し、日本人　それも純血か、それに近い血の純度を保っている日本人にのみ備わっているとされる、ある能力の存在を確かめようとした。ときには危険な事故を演出し、追い込まれた状況下で能力の発現を促そうとしたことからあった。

タクヤ・オキノが事故死したのは、サヤカがまだジュニアスクールに通っていた時のことだった。人権団体の運動によって昔よりは改善されているものの日系人に対する差別は根強く、定職に就けなかった父親はロンドンの下町の工事現場で日雇いの仕事をするこ

が多かった。その帰り道、パブで一杯引っ掛けて千鳥足で歩いていたらところを、居眠り運転のトロリーバスに轢かれたのだ。

日系人の特徴の一つとされる肝臓のアルコール分解酵素の少なさ故か、タクヤはまったく酒が飲めなかった。注射の消毒用アルコールにすら負けるほどで、サヤカの母親であるカズエ・オキノは事故ではないと激しく主張した。

だが、実際にパブでビールを飲んでいるところを見たという声や、更には実際にタクヤに酒を出したというバーテンドーまで証言台に上るに至って、タブロイド紙による日系人の謎の死を政府の謀殺とする論調はついでた。市交通局からたんまりと賠償金が支払われたこともあり、カズエもそのうちに夫の死因について何も言わなくなつた。

父の死に疑問を持ち続けたのは娘のサヤカだけだった。同じ日系人でもアルゼンチン人の血を濃く引いている呑気な母親に似ず、サヤカは父親の死は彼を追い回していた連中の仕組んだものだと確信していた。

それはある時、自分を慈しむ優しい笑みを浮かべた父が「誰にも言っんじやないぞ」と言って見せてくれた、ある不思議な力の存在を知っていたからだつた。

「わたしに何をさせようっつて言っんですか？ 言っておきますけど、わたしには父みたいないな力はありませんよ」

サヤカは目の前のバーナード准将を見据えて言っつた。准将は少し戸惑っつた顔をしてみせたが、目つきだけで続きを促した。だが、サヤカはそれ以上、何も言わなかつた。

取っつて代わつたのは、それまで黙つていたオブライエン教授だつた。

「……日本人研究の第一人者、トルコのハカン・シユキュル博士の論文によれば、日本人が例の力を發揮する為に保つていなくてはな

らない血の純度は75パーセント以上とされている。許されるのはクォーターで祖父母の3人までは純血の日本人でなくてはならないという厳しさだ。混血によって細胞内のベータ器官のDNAとの親和性が失われると、器官はその活動を停止すると言われている。過去の例からすると75パーセントという数字には多少の疑義が残るが、多くの場合、力が失われる純度がこの辺りだということは、情報部傘下の研究機関での人体実験でも実証されている。そうだろう、諸君？」

鼻眼鏡を介して放たれた皮肉を情報部の面々は鼻白みながらやり過ぎた。ただ一人、准将だけは余裕の笑みを浮かべていた。この程度の当て擦りで動揺しては謀略渦巻く軍部で生き残ることなど出来ない。

「それで、博士？」

「ミス・オキノの血統調査の結果もご存じのはずだ。ここ、ロンドンやパリ、ベルリン、マドリール、その他、連邦内の主要な都市に移住してくる日系人には必ず行われているのだから」

デイ・ヴァイオ少佐が4人を代表して大きく頷いた。情報部やその揮下の組織の仕事の一つに管轄内の日系人の把握というものがある。ロンドン市内にも市行政局の組織を装った調査部があり、デイ・ヴァイオはその責任者だった。

「仮に父親のタクヤ・オキノが純血の日本人だったとしても、母親のカズエ・オキノ 旧姓、エルナンデスはアルゼンチン出身の日系6世で、血の純度はせいぜい20パーセント。二人の間に生まれたミス・オキノの純度はどんなに高くても60パーセント以下。ちなみにミス・オキノについては大学院進学時の健康診断で、血液のサンプル調査を行い、ベータ器官不活性の結果も出ている」

自分の知らないところで身体を調べられていたという事実にはサヤカの頬が怒りに染まった。だが、ここで騒ぎ出すほど短絡的な性格ではなかった。

「准将、いえ、あえてデイヴと呼ばせて頂きますけど、もう一度訊

きます。わたしにいったい、何をさせようと思ってるんですか？」

「それについては、私が話そう」

それまでじつと黙っていた部屋の主が重々しく口を開いた。バーナード准将がそちらを振り返る。

「ハートフォージ卿？」

「軍や情報部から多くの出資と協力を得ているとは言え、これは一応、大学内部のことですからな。ミス・サヤカ・オキノ。君にオブライエン教授の研究室に異動して貰いたい」

「異動？」

サヤカはぎゅつと眉根を寄せた。

「わたしは今でも、オブライエン教授のゼミの生徒ですよ？」

「生徒としてではない。教授直属の研究員として、だ」

「……わたしがですか？」

大学院生であるサヤカは教授の指導の下、独自に課題を持って院内で研究に勤しんでいる。それとどう違うのか。

「勿論、それに見合うだけの見返りは用意するよ。君の研究課題は再生医療に関するクローニングの新規技術開発、だったかな？」

サヤカはこくりと頷いた。

「結構。その研究に予算をつけよう。ラボラトリーのすべての機材の優先使用権も与えるし、データバンクのアクセス権限もオブライエン教授の次に優先度の高いものを付与する。確か、読みたい論文があるがアクセス権限が無いと騒いでいたな？」

サヤカが再び頷く。

クローニングを始めとする生体工学の分野は一世紀も前に実用化のレベルに達している。だが、未だに目当ての器官や体の部位を作り出す際に発生するエラーをゼロに出来ない。サヤカの研究は細胞分裂時の形状誘導の新しい方式に関するもののだが、転用すれば禁忌とされている人体のフルクローニングを可能にしようという危険性がある為、関連する論文が参照出来ずに困っているのだ。

「そして勿論」

勿体ぶったように言葉を切り、ハートフォージはにんまりと笑った。

「給料も出ず。知つての通り、研究員の給料はないよりはマシといった程度のものだが、小遣い程度にはなるだろう。どうだ、悪い条件ではあるまい？」

確かにそうだった。軍情報部が絡んでいるのだけは気に入らないが、それ以外は望んでも手に入れられる待遇ではない。

自分の出自にまつわる境遇や父の死の謎、その他、鬱積した想いは簡単に拭えるものではなかった。だがその一方で、一人の学究の徒として「それはそれ、これはこれ」と是々非々に考えられるだけの理性もサヤカは持ち合わせていた。

「そうまでして、わたしに何をさせるつもりなんですか？」

「ある少年のケースワーカーを務めて貰いたい。オプライエン教授の第2研究室で保護しているのだが、少しばかり気難し屋でね。前任のケースワーカーとは上手くいかなかった」

「それを……わたしに？」

自慢ではないが、サヤカも狷介な性格をしていることでは人後に落ちない。東洋系のエキゾチックな美貌もあつて言い寄ってくる男には事欠かないのだが、付き合いが長く続くことは18年の人生で一度もなかった。そんな自分にケースワーカーなど務まるのだろうか。

戸惑っていると、バーナード准将が馴れ馴れしくサヤカの肩に手を置いた。

「なに、そう構えることもないさ。学長はあやうて脅かすようなことを言うが、私に言わせれば素直な良い少年だよ。ただ、世間と隔離されて生きてきたんで、ちょっと警戒心が強いだけなんだ。君なら彼の心を解きほぐせるに違いないさ」

気休めを言うなよな、とサヤカは恒例と化しつつある毒を吐く。

3人の部下たちもサヤカと似た感想を持ったようであざやかな表情をしていたが、当然のごとく、口には出さない。

「返事は今、しなくてはいけませんか？」

サヤカの問いに准将は破顔した。

「いや、一晩じつくり考えてくれて結構だ。良い返事を期待しているよ。」

「分かりました。では、失礼します。 あっ、そうだ」

「何かね？」

少し迷ったが、サヤカは疑問を口にすることにした。

「その青年の名前、教えてもらえますか？」

「構わんよ。彼の名前はラビ」

「……ラビ？」

「ニックネームだよ。戸籍上の名前はちゃんとあるんだが、我々はそう呼んでいる。由来は 会ってからのお楽しみというところだな」

准将は愉快そうに笑い、その場にいたサヤカとオブライエン教授以外の誰もが追従の笑みを浮かべた。サヤカは顔面に卒のない愛想笑いを貼り付けたまま、学長のオフィスを後にした。

CHAPTER 2

「それで、そのケースワーカーとやらの仕事を引き受けたのか、サヤカ？」

オーク材の一枚板のカウンターにドンツと音を立ててビアマグが置かれる。いや、それは一般にはビアジョッキと呼ばれるサイズなのだが、取っ手を握っている分厚い掌とそれにつながる黒い腕が人並み外れて太い為、そう見えるのだった。

壁に投影されたホログラム・スクリーンにはフットボールの試合北ロンドンの2強と名高いアーセナルとトツテナム・ホットスパーのノースロンドン・ダービーが映し出されている。富裕層にサポーターが多いアーセナルと労働者階級に受けの良いトツテナムの試合に社会の軋轢や不満を重ね合わせる市民も少なくなく、ダービーマッチは単なるフットボールの試合以上の白熱ぶりを見せる。

パブの客はそろってスクリーンに夢中で、トツテナムの選手がボールを奪う度に歓声が上がリ、奪われる度に落胆の呻き声上がる。おかげでカウンターに立つ黒人の偉丈夫と、その向かいのスツールに座るアジア人の女性には誰も興味を示さない。カウンターではもう一人、物腰の柔らかい白人の青年がゲームの切れ目にビールのお替りを求めてくる酔っ払いの相手をしている。

インナー・ロンドン ロンドン中心部はシティ・オブ・ロンドンを中心としてイーストエンド、ウエストエンドに分かれているが、ウエストエンドが別名をシティ・オブ・ウエストミンスターと呼ばれる、その名の通りにウエストミンスター宮殿や大聖堂、バッキンガム宮殿、ホワイトホール、スコットランドヤードロンドン警視庁等がある、治安が良くて富裕層の住む豊かな街区であるのに対して、イーストエンドはいわゆるロンドンの下町で主に労働者階級の市民、そして、貧困層と移民層が多く居住して

いることから治安も良くないとされている。うねうねと曲がりながら流れるテムズ川沿いの船着き場街ドックランズの住人には荒くれ者が多く、おまけにただでさえ人口過密な地域に他所者が流れ込んだ為、一種のスラム街を形成している所もある。

ロンドン市当局もそこで起こる犯罪や紛争について、熱心ではないにしても注意を払っていない訳ではない。だが、移民局や警察などの司法当局に関わり合いを持ちたくない連中にとっては腫れ物に触ることなく臭いモノに蓋をする当局の対応が有り難いという側面もあり、結果として小競り合いは起こしても大騒動は避けるというある種の不文律が街を支配している。

Jack the Ripper という、そんなイーストエンドの地が生んだ最高の有名人の名を冠したパブはテムズ川の港湾労働者がたむろするローワンストリートの突き当たりにあった。巢窟のような暗がりアルコールと麻薬の退廃的な臭いが漂う店内。誰もが競い合うように燻らせるタバコの煙が空気が白くなるほど充滿していて、「この店で待ち合わせをするなら頭の上に誘導灯を点しておかなくてはならないよ」という常連たちは嗤う。

サヤカはジョッキを受け取り、ビールの表面を覆う泡をゆつくりと啜った。温度は適温とされる室温のほんの少し下。サヤカの父親はぬるいビールは許せないと強く主張していたが、この国の伝統ではビールは冷やして飲むものではない。

「どうしようっかなーって思っているとこよ、ジャック」

ジャックはニヤリと笑った。本名はアンソニーというのだが店の名前に合わせてそう名乗っている。

「受ければいいんだ。奨学金スカラシップって言ったって返さなきゃならない借金には違いない。けれど、ケースワーカーとやらになれば、今後の学費も免除になるんだらう？」

「そうなんだけどさ」

サヤカは小さなボウルのナッツを掴んで口に放り込む。ポリポリと噛み砕き、ビールで流し込む。色気の欠片もない仕様にジャック

は目に手を当てて天を仰いだ。それに向かつてお替りを求める腕が無言で突き出され、ジャックは更に苦々しい顔をした。

「週に何度、博物館に行かなきゃならないんだ？」

「4日。月、火。1日休んで、木、金。土日は研究所自体が休みだから、あたしも休みなんだってさ」

「自分の研究は？」

「研究所に詰めてる時も、一日中、一緒にいなくていいんだって。その間にやるわ。機材の引っ越しもやってくれるって話」

「至れり尽くせりだな」

「踏んだり蹴つたりにならなきゃいいんだけど」

「乗り気じゃないのか？」

「そういうわけじゃないけど……」

サヤカは不満そうに頬を膨らませた。

この話で気に入らないのは軍情報部が関わっていることだけだ。サヤカは自分にそう言い聞かせる。

彼らの口ぶりから察するに、ラビと呼ばれる少年は彼らが進める何らかの実験モルモットに関わる実験体に違いない。だが、それは自分とは関係なかった。人体実験が倫理的に禁忌であるのは今も昔も変わらな

いが、その禁忌を破ることで科学が進歩してきたのも事実だった。一個人としてその歴史に嫌悪感を覚えるのと同時に、自らの前にその禁忌が立ちはだかった時、憎悪を覚えずにいられる自信はサヤカにはなかった。

「行きたくなければ断ればいい。そうしたから不利益な扱いはしないって、学長が言ったんだろう？」

ジャックはコーラの瓶を口に運んだ。大きな彼の手の中ではあまりに儂く、まるでウンダーベルグの小瓶のように見える。酒場を経営しながらジャックは酒が飲めない。そのことを知るのはいくく一部の常連だけで、サヤカはそのうちの一人だった。

「そうは言っけどさ」

「口先だけだっけ言うのか？」

「だって、そうでしょ。あたしみたいなBPP、あいつらにとってはいつでもいなかったこと出来る、ゴミみたいなもんだし」

British Protected Person 英国保護市民と呼ばれる、この国の市民権の中では最下層に位置する身分。連邦法では市民権の上下で差別的扱いをしてはならないことになっているが、連邦直轄ではない自治権を持つ国々では公然と市民権の種別による差別が行われている。一つにはそうすることで国民の管理を行き届かせる為、もう一つには酷い扱いに耐えかねて下層階級の多くを占める移民が自国から出ていくことを期待して。国力に直接圧し掛かる負担である難民をどう減らすかは、多くの国々でも重要な政治課題だった。

「受けるしかないんだよね、結局のところ」

サヤカはジョッキを空にして、ジャックに負けじとドンと音を立ててカウンターに置いた。お替りを注ごうと手を伸ばしたジャックに目配せで要らないと告げる。アジア人の常としてサヤカも肝臓のアルコール分解酵素が少なく、酒に酔うのは早い。一昔前には「日本人を滅ぼすのに武器は要らない。奴らの水がめの中身を安物のジンとすり替えてやればいい」というジョークも囁かれたものだ。

「分かってるんなら、そんなにブツクサ言っなよ」

「……ふん、どうしてあたしが迷ってるか、分かんないの？」

「さあ？」

「ドックランズから通うのは大変だから、近くに部屋フラットを用意してくれるんだって！」

「いい話じゃないか。おまえみたいな若い娘が、こんな掃き溜めみたいな街にいつまでもいるもんじゃない」

サヤカは残っていたナッツを掴んでジャックに投げつけた。

「都合のいい時だけ年寄りぶるな、このロリコン！」

「誰がロリコンだっつて？」

「あんたがあたしの処女ヴァージンを奪った時、あたしはまだ16歳だったのよ。しかも、あたしは周りの子より胸もペタンコでさ。それに手

を出すなんて、どう考えたってロリコンじゃん」

ジャックはグツと詰まった。隣で忍び笑いを浮かべる白人青年をギロリと睨む。青年は取ってつけたような澄まし顔に切り替えると他の客の接客に行った。

「……人聞きの悪いことを言うな。奪ったんじゃない。おまえが捧げたんだ」

「捧げた？ あんた、神様か何か？」

「この店の中じゃ神様みたいなものさ。汝ら、下々の者どもに酔いという名のささやかな幸せを与えてやってるんだからな」

「ああ、そう ふわあ」

サヤカは不意に大欠伸をした。酔うとすぐに眠気が襲ってくる性質なのだ。言い争いを続ける気力もなくなり、サヤカはポケットから引っ張り出したしわくちやの2ポンド紙幣を2枚、カウンターに放り投げた。20世紀の終わり頃から発展した高度情報化社会ではすべてにコンピュータが介在し、一度は決済の大半の場面から紙幣や硬貨の姿が消えたこともある。だが、行き過ぎたコンピュータ化は多くの問題を露呈し、23世紀の現在は多くの国で古くからの貨幣中心の経済に軸足を置くに至っている。

「まったく、若い娘が裸で力ネを持ち歩くなよ」

「だから、年寄りぶるな、この工口親爺」

「俺は親爺じゃない。まだ25だ」

「見えないってば。 ひっく！」

酔いはついにしゃっくりに変わった。目を白黒させながら懸命に抑えようとするが、そうすると却って収まらなくなるのがしゃっくりのクセの悪いところだ。

ジャックから水を貰ってゆっくりと飲み干すと楽になり、サヤカは酔いのまわったとろんとした眼差しを年上の恋人に向けた。

「先にフラットに帰ってる。寝てたら起こしてね」

「何の為に？」

「お別れ会の為に。言っとくけど寝かさないからね」

「それはどう考えたって俺のセリフだよな。おい、途中の道で寝るんじゃないぞ！」

「分かってる ひっく！」

「おいおい……」

サヤカはまた盛大なしゃっくりを繰り返した。ジャックはやれやれと言いつつカウンターから出て来て、サヤカを抱きとめて背中をさすってやった。そのままカウンターの相棒を振り返る。白人の青年は薄い笑みを浮かべていた。

「彼女を家まで送ってあげた方がいいんじゃないか、ジャック」

「悪いな。濟まないが少し出てくるよ、ジェイド」

ジェイドと呼ばれた青年は小さく頷いた。

「ああ、ゆっくりしてくれればいいさ」

CHAPTER 3

翌週の日曜日、外務省の使いを名乗る男が現れたのはまだサヤカがジャックの腕の中で眠りから覚めやらぬ早朝のことだった。

(……まったく、こんなに朝早く、外務省があたしに何の用ッ?)

サヤカは機嫌の悪い野良猫のような剣呑な眼差しで、いかにも配属されたばかりといった感じの初々しい金髪碧眼の青年を怒鳴りつけた。

生意気な小娘に対して居丈高な態度に出ようとした青年を押し止めたのは騒ぎを聞きつけて起きてきた大男 ジャックだった。だが、そのジャックに ロイド・C・キャラガー なる彼の身分証と召喚状が本物であることを知らされ、サヤカは渋々、青年が運転するジャグワXR-30の後部座席に乗ったのだった。

明日からの研究所勤めに備えてやらなくてはならないことは山積みだった。学内のことはすべてお任せで良くて、オブライエン博士の第2研究室に程近い通りに用意された新しい部屋への引っ越しは自分でやらなくてはならない。家主の気分次第でいつ追い出されるか分からない身の上故、身の回りの荷物は出来るだけ増やさないように暮らしてきたサヤカだったが、それでも前日に遊んでいる暇はない。

「ねえ、どこに連れていくのよ?」

返事をしなかつたら運転席の背もたれを蹴り上げてやる。サヤカがそう思っていると、大型高級車のジャグワを意外に手慣れた様子で走らせていたキャラガーがルームミラー越しにサヤカを睨んだ。「黙っている」

「……何だつて？」

「黙って座っていると言っているんだ。心配しなくても入国管理局に突き出したりはしない」

一口に英語と言ってもそのイントネーションや発音、言い回しの違いは多岐に渡る。青年の言葉遣いは国营放送の容認発音である典型的なBBCイングリッシュだったが、サヤカの他所行き用のクイズと違って、生まれてこの方ずっと使い続けているような自然で流暢な響きだった。この国ではそれは育ちの良さを示している。

入国管理局云々の差別発言に噛みついてもよかったが、それよりもキャラガーの高慢な態度の方がサヤカの気に障った。

「ふん、いいとこの坊ちゃんだからって、お高くとまってるんじゃないわよ」

「お高くなんかとまっていない。悪いんだが、君とぺちゃくちゃおしゃべりをする許可は下りていないんだ、ミズ・オキノ」

「あつそ。どうでもいいけど、あたし、結婚なんかしてないわよ」
「アンソニー・ハーバート・ウィルキンソンとは事実婚ではないのか？」

一瞬、誰のことかと思つたが、それがジャックの本名であることをサヤカは思い出した。キャラガーはジャックに身分証明証の提示は求めていない。そこまで調査済みということだった。

「違うわよ。残念だけどね。つまない勘繰りしないで」

「勘繰りなんかしていない。だから、ミセスとは言わなかった。つまらない揚げ足取りはやめて貰おうか」

「ふん」

サヤカにしたところで行き先を答えてくれると期待していたわけではなく、不満と苛立ちからくる八つ当たりには過ぎなかった。仏頂面のキャラガーは何も言わずにラジオの朝のBBCニュースのボリウムを上げ、サヤカは窓の外を眺めることにした。

早朝であることを差し引いても、交通事情の良くないことで悪名高い中心街の道路の流れはスムーズだった。そもそも、国務機関が

日曜日に仕事をしていること自体が不自然なのだ。お役所や銀行は勿論のこと、壊れたボイラーを直す配管工ですら、日曜日に仕事を
する人間はこの国にはいないはずだった。

ジャグワはトラファルガー・スクエアからウェストミンスター
の官庁街を通り抜け、テムズ川沿いの道を走ってヴォクソール橋を渡
った。対岸の袂に現代建築と古代の宮殿の造りが入り混じったよう
な” Babylon on Thames (テムズ川のバビロン)
”と揶揄されるSIS本部ビルが見える。MI9のような連邦政府
の軍情報部とは別に英国にも独自の諜報機関があり、それがSIS
(英国情報局秘密情報部)だ。

世界は連邦政府の傘下であり、建前上は国家間紛争は存在しない
とされるこの時代に諜報機関が存在するのは明らかな矛盾だが、連
邦のもう一つの主構成国であるフランスですらそれを問題視しよ
うとはしない。かの国にも同じように諜報機関(フランス対外治安総
局: Direction Generale de la Securite Exterieur: DGSE)があるからだ。

ここまで来ればどこに連れて行かれるのかは火を見るより明らか
だった。SISビルを通り過ぎてヴォクソール・レイル駅の高架を
潜った先、ケントンレーンには大英博物館の第6別館がある。オ
ブライエン教授の第2研究室はその中にあり、大学が用意した部屋
も博物館のすぐ近くにあるのだ。サヤカは小さく舌打ちした。

「あんだ、引越しの手伝いでもしてくれるの？」

「まさか」

「だよねえ」

英国政府がそんなことをするはずはない。そもそも、教授や大学
のスポンサーは英国政府ではなく連邦軍情報部であり、キャラガー
が属する外務省が自分たちの縄張り、しかも目と鼻の先で軍部に好
き勝手な真似をされて面白いはずがなかった。サヤカはそんな簡単
なことには気付かずこのこと車に乗せられた自分の迂闊さを呪っ
た。

逃げた方が良いのかな、とサヤカは思った。だが、そうしたところで事態に変化があるわけではなかった。今度は運転席の新米坊やではなく、SIS 外務省の管轄下にある のエージェントに付きまとわれるだけだ。車から飛び降りたりして怪我をするだけ馬鹿馬鹿しい。

ジャグワは高架下を通り過ぎて、大英博物館第6別館の 関係者以外立入禁止 の札が掲げられた裏門に吸い込まれていった。

キャラガーに促されてサヤカが足を踏み入れたのは、博物館の収蔵品の展示スペースのうち、普段は一般公開されていない区画だった。

世界中を巻き込んだ第3次世界大戦当時、世界第3位の核兵器保有国であったにもかかわらず、奇跡的に戦禍に巻き込まれなかった英国には世界遺産級の建築物が数多く残されている。

ブルームズベリーにある大英博物館もその一つだが、戦後、壊滅状態の世界中の博物館から収蔵品を集める計画が進められ、ただでさえ満杯状態にあった本館はパンク状態になった。その為、順を追ってロンドン市内に別館が建てられていき、サヤカがいる第6別館も今から10年ほど前に建てられたものだった。外観は無機的な近代建築だが内装はヴィクトリア王朝風の重厚な雰囲気再現されており、こういうのに拘るのはいかにもこの国だよな、とサヤカは思う。

「こんなとこ連れて来て、どうするつもり？」

先を歩くキャラガーにサヤカが声を掛けた。

「こんなとこ呼ばわりは酷いんじゃないのか？ 明日から君の職場になるんだろっ？」

「そうだけどさ。けど、入ったことないんだもん」

「どうして？」

直球の疑問をぶつけられ、サヤカは少しだけ怯んだ。

「……どうしてって言われても困るけど。まあ、あたしが大学でや
つてる研究に役立ちそうな物は展示されてないしね」

「君のルーツに関わる物は展示されているだろう？」

「ルーツ？」

「ここには君たち、日本人科学者の歴史上で最も重要な2人の人物
の遺した品物が展示されている」

「アキラ・クロサキとナオコ・エトウのことね。一つ、訂正してい
てあげるわ。展示はされてるけど公開はされてない」

「そうだったかな？」

「しらばっくれるな。サヤカは胸の中で毒づく。」

「ついでにもう一つ、訂正しとくわ。あたしはちゃんとした市民権
を持った英国市民。日系人ではあっても日本人じゃないわ」

「民族の血統は大切にすべきだと思うがね」

「その血統を根絶やしにしたのはあんたたちじゃない。両博士の展
示が公開されていないのは、ベータ器官の歴史は日本人迫害の歴史だ
からよ」

「否定は出来ないな」

「やがて、黒塗りの一際大きな扉の前でキャラガーは足を止めた。

丁寧な仕草でノックする。中からの声はサヤカには聞こえなかった
が、キャラガーは恭しく一礼して扉を開けた。

中はちよつとしたダンスホール並みの広々とした空間だった。中
庭に面した窓から見える緑もロンドン名物の曇天のせいで見えてい
て、冬の訪れにはもう少し時間があるにもかかわらず、酷く寒々し
く見える。壁にホログラム・スクリーンは掲げられているが展示物
を収めるケースの類はなく、室内はがらんとしていた。

奥にある別の扉が音もなく開き、車椅子の老人が入ってきた。し
んとした室内に微かにモーターの唸りが響いた。同軸二輪制御の大
型の動輪と前後に二対の多脚式マニピュレータを備えたタイプで、
不整地走行時の脚を展開した姿から蜘蛛スパイダーと仇名されることが多い。
サイバネティクス技術や強化外骨格パワードスーツのおかげで身体障害があっても

何らかの方法で補える時代ではあるが、見た目の問題や機械補助に身体自体が耐えられないケースもあり、車椅子にも高齢者を中心に一定のニーズがあるのだ。

「エイミス卿、ミス・サヤカ・オキノをお連れしました」

「ああ、ご苦労だった、キャラガー」

血色の良くない痩せた顔。丁寧に撫でつけられた少し心許ない量の白髪。魔女のように細く尖った鉤鼻と薄い灰色の目。丁寧に整えられた口髭と常に人差し指を当てて「シート」と言っているような尖った唇。老齡なのは間違いないが年齢の分り難い男で、50歳から70歳まで何歳と言われても納得できそうだった。仕立ての良いグレンチェックのスーツを着ているが、腰から下にはバーバリーチェックの膝掛けをしているので脚は見えない。

エイミスと呼ばれた男が小さく頷くと、キャラガーはまた恭しく頭を垂れてから部屋を出ていった。

「私はジョナサン・エイミス。上院議員だ。だが、ここでは卿はつけなくていい」

エイミスは、さも寛容を示したと言わんばかりの口調で言った。

英国議会上院　かつては貴族院と呼ばれ、現在においてもその主たる構成員は英国貴族が占めている。

23世紀の現在も英国には伝統の階級社会と貴族制度が残っていて、建前は民主主義国家であるこの国を牛耳っている。連邦政府において英国が主導権を握り得たのは旧宗主国と旧属国・植民地の連合体である英国連邦共同体のネットワークが超大国無き後の世界で大きな発言力を持ったからだが、その背景にもかつての海外領土に多くの資産を保有し、隠然たる影響力を持ち続けていた貴族の働きかけがあったと言われている。

エイミスは少しの間、サヤカの頭のとっぺんから足先まで、何度も無遠慮に視線を往復させた。そして、大きな溜め息を洩らした。

「急ぎのこととは言え、淑女をろくな身支度をする暇もなく呼び立てた非礼は詫びねばならないな。それと、如何に緊縮財政を強いら

れているとは言え、まともな服を買う余裕もないほど奨学生の手生活を困窮させていることも。近々、財務省の人間と会う予定があるので、改善するように申し入れておこう」

この爺イ、何を寝言ほざいてやがるんだ。サヤカは顔に卒のない無表情を浮かべたまま、内心で目の前の貴族を罵倒した。

早朝の呼び出しへの反発もあつて、サヤカの恰好が通学時よりもラフなもの。穴だらけのデニムとトレーナー、古着のダツフルコート。だったのは事実だ。だが、言われるほど安い服を着ているわけでもなかった。

更に言えば、サヤカの状態はそれほど困窮しているわけでもない。マザーグースの ロンドン橋落ちた で有名なロンドンブリッジの南側にあるウィルシャー製肉工場でクローニング・オペレータのアルバイトをしているし、ジャックにも内緒にしている別の副業もある。実際のところ、サヤカの週給はその辺りのビジネス街で働いている人々と変わらないか、少し高いくらいなのだ。それなのに奨学金を受けているのはケンブリッジ工科大学の学費が上流階級の子女でもないと思えないほど高いのと、母親へ仕送りをする必要があるからだ。

「こんなところに呼び出して、一体、何の用だ　そう言いたげな顔だな」

「当然でしょう。他にどんな疑問を持てと？」

「ミス・オキノ。サヤカと呼んでも構わないかね？」

「……どうぞ」

「ありがとう、サヤカ。では、君は自分がここに呼び出されたのは何故だと思っかね？」

「英国政府と連邦軍部の縄張り争いのせいじゃないですか？」

老人の口許に皮肉めいた笑みが浮かんだ。

「もう少し、詳しく」

「連邦軍は　軍情報部が言ったほうがいいのかもかもしれませんが、彼らはケンブリッジ工科大学のオブライエン教授に何かの研究をさ

せています。教授の専攻は生体工学ですからそつちの関係のものをしよう。そして、英国政府はその研究が自国内で行われているのに自分たちに断りが無いことが腹立たしくしようがない。軍が研究するからにはその内容は何らかの軍事的価値があるんでしょうけど、自分たちがその分け前に与れそうにないのも気に入らない。ついでに言つちやえば、ひよつとして軍部内で糸を引いているのはフランス系の勢力で、成果をすべて持つていかれるんじゃないかと危惧している」

「いやいや、さすがだ、サヤカ。そこまで分かっているなら、私が君に何を頼みたいかも分かるだろう」

「スパイ」

「我々としては 内部協力者 と呼びたい。同じことだと君は嗤うだろうが」

その通りだとサヤカは思った。だが、浮かべたのは柔らかで、しかし、どこかに残忍さを湛えた暗い微笑だった。

上院議員 貴族と一口に言つても巨大な莊園や領地を抱える豪族もいれば、廷臣と呼ばれる領土を持たない宮廷貴族もいるが、いずれにしても難民一步手前の市民権しか持たないサヤカから見れば天上人に等しい。

そう思えば思うほど、生来の天邪鬼な気性がむくむくと頭をもたげる。普段のサヤカなら相手の言葉に耳を貸すことすらしないはずだった。それが大人しく言葉を交わしたばかりか、承諾の意味に取れる笑みで応えたのは偏に研究の背後に立っているMIE9への嫌悪感のなせる業だった。

「見返りはあるんですか？」

「愛国心では駄目かね？ 君はさつき、キャラガーに自分は英国市民だと言つていたようだが」

聞いてたのかよ。どこにマイクがあったのかとサヤカは訝つたが、何のことはない、キャラガーがマイクを付けていただけの話だ。そうであれば扉の前でのやり取りも納得がいく。

「国民だからって皆が愛国心を持つてるわけじゃないですよ」

「残念だが、君の言う通りだ。報酬を用意したほうが良いかね？
それともサウスロンドンのセント・エルザ病院に入院中の母上が、
もつと手厚い治療を受けられるように取り計らったほうが良いかね
？」

サヤカが大学に通う為に家を出た後、サヤカの母親、カズエは妹
同然だという従妹と同居して生活していた。アルゼンチンから母を
頼って移民してきたこの女はいかにも南米人らしく厚かましいとこ
ろがあり、サヤカは今一つ好きになれないでいたのだが、母が身体
を壊して無収入になると母の家財道具を勝手に処分してさつさと出
て行ってしまっていた。能天気な母親にしては意外なことにきちん
と保険料を払っていたおかげで医療費はさほどかからないものの、
そういう事情でサヤカの仕送りだけが頼りの母がその他の費用を抑
えようとすれば、どうしてもランクの低い病院を選ばざるを得なか
った。セント・エルザ病院は貧民救護院に毛が生えた程度の病院だ
った。

旨い話には裏がある。ジャックがよく口にする言葉だった。だが、
ケースワーカーの話を受けた時点でサヤカにはさほどの選択肢はな
いのだった。

「連絡役は誰がやってくれるんですか？」

「さつきの若者だ。ロイド・クラーク・キャラガー」

「あいつ いえ、あの人か？」

「頼りないかね？」

サヤカは返事の代わりに忍び笑いを浮かべた。事実、そうだった
としても言えるわけねえだろうが。

「確かに彼は若いからな。気持ちは分らないではない。だが、彼の
名誉のために言っておくと、キャラガーはあの歳で00要員の候補
ダブルオー
に選ばれた男だ。信用してやってくれないかね」

「はあ……」

あの坊ちゃん面した新米とダニエル・ハントを同列に扱っていい

ものか、サヤカは訝った。だが、これもサヤカに選択権がある話ではないのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6563z/>

Innocent Rabbit

2012年1月9日05時04分発行